神護寺蔵「和気氏三幅対」の成立と訓釈（続補訂）

若井勲夫

要旨

筆者は「神護寺蔵『和気氏三幅対』の成立と訓釈」を本誌四十六号（平成二十五年三月）に、続いて、その補訂を同四十八号（同二十七年三月）に発表した。これは江戸時代初期に和気清麻呂の後裔の半井瑞雪が高雄山神護寺の開創者である和気清麻呂、和気医道を盛り返し和気氏中興の祖とされる定成の子である時成、その子基成、の三名の肖像画に賛偈を禅僧に書かせたものを当寺に寄進したものである。筆者はその偈（漢詩）について題詞、本文、左注を解読し、訓読して書き下した上に、現代語訳と語釈をつけた。また、その賛が出来上る経緯と揮毫者について考証、解説した。補訂では半井瑞雪の系図上の位置づけを確証し、併せて二、三の問題を修正し補足した。さらに、徳川家光が半井成忠（瑞堅）に与へた狩野三兄弟の「三幅一対」が右の「三幅対」と同一であるかについて論述したが、それを証する史料が不足し、課題を指摘するに留めた。

本稿は右の二編に続いて、さらに補足、訂正する点が出てきたので、再び補訂版とするものである。以下、その要点を箇条書きで記す。

（一）和気時成像の偈をそのまま右から左に読んで解釈してきたが、これは全く初歩的な誤りであった。対聯、二幅対、三幅対で向って右に位置するものの書法は左から右に書くことになってゐる。そこで、全面的に読み直して、訓読、現代語訳、語釈を改めた。その際、一部の解釈を考証し直して修正した。

（二）この三幅の肖像画は半井家と神護寺で「三幅対」として伝へられてゐる。今回、偈の書き方だけでなく、文字の作法、初稿で触れた衣裳や坐り方などにより、明確に三幅が一対となって描かれてゐることが確実となった。

（三）和気真人（清麻呂）像の偈について、一ヶ所、訓みを改め、語釈でその是非を語法の点から考証した。また、「和気真人」は清麻呂であり、平安前期の和気時雨ではないことは前々稿で述べたが、「法眼」の称号について説明し、改めて右の補足とした。

（四）和気基成像の偈について、一ヶ所、対句の表現であることを明確にして、訓みを改め、語釈でその解説をした。また、基成の伝記的な説明を少し付け加へた。

〈付記〉

本稿は正篇の補訂版に続いて再度の修正である。本論集の論文は機関リポジトリとして広く公開されてゐる。特に今回は、賛偈の読解の基幹に関はる重大な問題であり、これをこのまま放置することは誤った内容が広まる恐れがある。よって、ここに「続補訂」として発表することにした。

キーワード：神護寺蔵「和気氏三幅対」、三幅対の書き方、和気清麻呂、和気時成、和気基成

一、本稿の趣旨と三幅対の意義

筆者は「神護寺蔵『和気氏三幅対』の成立と訓釈」を本誌四十六号（平成二十五年三月）に発表した。この「三幅対」とは江戸時代初期に和気清麻呂の後裔の半井瑞雪（琢庵）が高雄山神護寺に当寺の開創者である和気清麻呂、藤原氏に抑へられてゐた和気医道を復興し和気氏中興の祖とされる和気定成の子である時成、その子基成、の三名の肖像画に賛の偈を禅僧に書かせたものを当寺に寄進したものである。この三幅の偈（漢詩）について、筆者は題詞、本文、左注を解読し、訓読して書き下した上に、現代語訳と語釈を施した。また、その偈の成立の経緯と揮毫者について考証、解説した。補訂では半井瑞雪の系図上の位置づけを確かにし、併せて二、三の問題について修正、補足をした。さらに、徳川家光が半井成忠（瑞堅）に与へた狩野三兄弟筆の「三幅一対」が神護寺蔵の「三幅対」と同一であるかについて論述したが、裏付ける史料が十分に足らず、問題点を提示するに留めた。

ところが、この補訂版を執筆した後、右とは別に、時成の賛偈に関して重大な誤りがあることに気付いた。それはこの詩と後書き（左注）を左から右へ読むべきであるのに、縦書きの一般的な右から左に進む読み方で解釈してゐたのである。時成像の書は初めに揮毫者の署名と落款があり、次に日付がある。この通りに読んでも理解できないことはないが、やや不自然である。続いて、この偈を書いた事情の説明が二行、終りに時成の肖像であることを記す画題が示される。次に、七言絶句の詩はこのままでは起句が導入として唐突で、しかも概括的に要約のやうになってゐる。また、結句は事情の説明が具体的で、結びになってゐない。しかし、筆者は疑問に思ひながらも、この順序通りに訓読し、解釈しようと努めて、発表した。

しかし、これは完全な間違ひであった。和気長成の肖像画[1]（軸装）の写真を見てゐた時、「寛喜二年卒　六十三歳／仙院御供参隠岐後帰京／翌日為／…従四位下　典薬助／施薬院使　権侍医／和氣長成朝臣」とあった。これは左側から始って、途中は「翌日、仙院（後鳥羽上皇）の御供と為りて隠岐へ参り、後、帰京す、寛喜二年（一二三〇）卒、六十三歳」と読まなければならない。

このやうな基礎的、基本的なことを知らなかったとは恥ぢ入るばかりである。対聯（対幅）の形式の落款の位置は、右聯は右側、左聯は左側に区別して署名、押印するのが伝統的な形である[2]。これは二つの平面図形の関係を見る時、両者の中央の線分に対して、右聯と左聯が線対称として一対一に対応するといふことである。このことは二幅対

の場合も同じことである。さらに、三幅対の書き方について、出光美術館の次長、笠嶋忠幸から次の通りの教示を得た。[3]

1．第一位たる中心像（中尊）は正規の楷書体や隷書体で整頓された書き方をする。賛は右から左へ書く。装束は黒色が正式である。

2．あとは肖像の顔の向きに従ふ。向って右の第二位の時成は左を向いてゐるので、左が前であり、従って、左から右へ書く。

3．向って左の第三位の基成は右を向いてゐるので、右が前であり、従って、右から左へ書く。

以上の助言によって、三幅の衣裳の違ひ、字体の書き分け、賛を書く方向が定式通りに理解できる。中心、中尊の清麻呂を真中に置く。次に、脇侍の時成、基成の顔は中心に向ひ、それぞれ賛が右、左に流れて本尊を守る。まさに線対称として、位置が定り、三幅が一対として完成されてゐるのである。このやうにして、この三幅は別々に構想されたものではなく、当初から一対になるやうに、つまり三幅対として描く意図を持って成されたと、半井本家と神護寺に伝へられてゐる通り確言できる。[4]

本稿をここに続補訂として発表する主目的はこの重大な誤謬を訂正するとともに、三幅対としての意図を改めて指摘することにある。具体的には、前々稿の「三、和気時成像」の詩偈の本文、訓読、現代語訳、語釈の順序を正した上に、一部を修正して書き改める（成立はそのまま）。また、この機会に、「二、和気清麻呂像」の訓読、語釈の一部と成立、「四、和気基成像」の訓読、現代語訳、語釈の一部について修正、追補する。四年がかりの執筆を経て、やうやく「和気氏三幅対」の成立と訓釈を果すことができた。この三編はいづれ本文をまとめて整定し、現在、出版の準備中の『和気清麻呂公景仰史』に収録する予定である。

二、和気清麻呂像

〈本文〉（一部）

大功不宰久彌新

〈訓読〉

大功は宰（つかさど）らず、久（ひさ）に彌新（いやあたら）しく

〈語釈〉

○大功不宰久彌新―最初の「大功不宰」の四句を禅家では「大功は宰せず」、あるいは、そのまま音読して「大功不宰」と読むことが多いが、前々稿で述べたやうに、これでは国語の訓読としての意味がない。音読した時、禅僧らしく力強さを表さうとする意図は分るが、大事なことは国語の表現として訓釈することである。なほ、「大功」は格助詞「が」ではなく、係助詞「は」で訓むべきである。「は」は係結びとして文末まで陳述が及ぶ。「大功」といふものはと、一つの主題を提示して、「不宰」と「久彌新」の両方についてその判断を表してゐる。「彌新」は前に「いよいよあらたに」と訓んだが、これで誤りではない。「彌」の訓は「いや」が一般的だが、上代では「いよいよ、ますます」の意では動詞、形容詞に冠して用ゐられたからである。しかし、「いよいよ」は中古以降の用法で、現代の感覚では口語的であり、一方、

「いや」の方が歌語、雅語らしく、短く簡潔である。そこで、「新」は形容詞に解して、「いやあらたしく」と訓める。しかし、古語の「あらたし」が馴染みにくく、現代の文語和歌の用例からも「いやあたらしく」と訓むことにする。この一句は全体として、偉大な功績はそれを果した者の痕跡を留めず、それに固定、拘泥することなく、時代の変遷にごく自然に応じて改善、改良されて、常に新しい価値を生み出してゐることを言はうとしてゐる。従って、やはり「新たに」より「新し」の方が適切であらう。

なほ、付け加へれば、「久彌新」を「久しく彌新しく」と訓むと、語尾の「しく」が続いて単調になる。これでもよいが、「久」は「久に」と訓み改める。「ひさ」は上代に活撥に語構成にはたらいた形状言である。「妹が袖別れて比左（ひさ）になりぬれど（萬葉集三六〇四）、「月も日も変らひぬとも久経（ひさにふ）る」（同三一一）など、「ひさし」と同じ意味で用ゐられてゐる。現代人の語感には合はないかもしれないが、二音でより簡潔に引締り、力強くなり、起句としてふさはしい。

○七百年来法眼裡―この偈は万治二年（一六五九）から寛文二年（一六六二）の間に成立した。この「七百年」前を単純に計算すると、西暦九六〇年前後となる。この時期に医師を務めてゐた和気氏は和気時雨（ときさだ）である。時雨は天暦十一年（九五七）に典薬頭となり、康保二年（九六五）に六十七歳で没した。ただし、「法眼」の位は今まで与へられてゐた僧侶に準じて、中世になってから仏師、絵師、医師などに授けられた称号で、出家して法体となった。時雨の時代にはまだその制度はなかった。和気氏で法眼になったのは室町時代の和気明重（永正十六年〈一五一九〉没）が最初である。[5] 時雨は和気清麻呂の子である真綱の孫に当り、これ以降、医師の家系が続くことになった。このことから時雨が和気医道の祖と位置づけられてゐる。

以上のことから、この句は厳密に和気氏の個人を特定してゐるのではなく、広い立場から概括的に和気氏が医道に携はってきたことを指して表現してゐると解すべきである。

〈成立〉

○黄檗老人

（四〇九頁上、左三行目～左一行目を次の通り改める。）

太和集は翌、寛文二年（一六六二）に南源と高泉が編集して、鉄眼によって開板された。従って、この偈の作られたのは、隠元が神護寺に参拝した万治二年（一六五九）から寛文二年までの四年間といふことになる。

○佛日山野獨知

（四〇八頁上、左六行目～左四行目を次の通り改める。）

慧林（獨知）がこの書を揮毫したのは、慧林が佛日寺に入山した寛文元年（一六六一）から隠元が寂する同十三年を経て、瑞雪が没する延宝四年（一六七六）までの間となる。しかし、ほかの二像は既に出来てゐるので、偈の成立時期の下限の寛文二年から一、二年を見て、同四年までのことであらう。

三、和気時成像

〈本文〉

入五雲深開講莚
亘今亘古俊才全
胸蟠萬巻名鳴世
起死回生地下僊
　正四位上典薬頭和氣時成肖像
　後昆半井瑞雪介于人請記其顚
　未不得黙止綴一偈塞其責矣
　　明暦第二歳舎丙申三月吉辰
　　前南禅昕叔老衲顕晫書

〈訓読〉

五雲の深きに入り、講莚を開き
今に亘（わた）り古（いにしへ）に亘り、俊才全し
胸、萬巻を蟠（わだかま）らせ、名、世に鳴り
起死回生す、地下の僊たり
　正四位上、典薬頭、和氣時成の肖像
　後昆半井瑞雪、人を介して其の顚を記さんことを請ふ
　未だ黙止し得ず、一偈を綴り、其の責を塞ぐ
　　明暦第二、歳（ほし）、丙申（ひのえさる）に舎（やど）る、三月吉辰
　　前南禅、昕叔老衲顕晫書す

〈現代語訳〉

五色の雲のかかる奥深い宮中に入って、病状や処方を説き、昔から今に至るまで、その秀れた才能は欠けたところがなく、完全である。その胸の中には多くの書物が積り、蓄へられて、和気氏の医道の評判は広く世に知られ、医術の力により死に瀕した病人を生き返らせる。まさにあの世の仙人たる資質を持ってゐる。

正四位上、典薬頭の和氣時成の肖像。

後の子孫である半井瑞雪が人をなかだちにして、先祖の根本のいきさつを記してほしいと依頼した。

黙ってそのままにしておくことができず、詩偈一首を作って、その責任を果す。

明暦二年、歳星（木星）が丙申に舎る（干支は丙申）、三月吉日。

前南禅の老僧、昕叔顕晫が書く。

〈語釈〉

○入五雲深―五雲は仙人、仙女の遊ぶところであるが、比喩的に捉へてもこのままでは分りにくい。隠元は渡来僧であったが、昕叔は日本人であり、ここは国語の用法として、五雲が宮中を指すと考へる。時成の父で和気氏中興の祖とされる和気定成は侍医であり、典薬頭であった。『大日本人名辞書』によれば、定成は後鳥羽上皇、高倉天皇、皇太后の病気を治した。また、その息で本肖像画の時成は、父と同じ役職に就き、後鳥羽上皇、中宮に施術して治癒した。このやうに宮中の信任が厚く、侍医として評価を得たことをこのやうに文学的に表現したのであらう。次の「開講莚」は医学の講義をしたといふのではな

く、病状の説明や処方の仕方を説いて上奏したことを言ってゐるのであらう。

○亘今亘古―『句双紙』『禅林句集』には語順を逆にし「亘古亘今」とあり、「いにしへにわたり、今にわたる」と訓む。

○胸蟠萬巻―「胸」は『新大字典』によれば「胸」の俗字であり、また、『新撰漢字総覧』にはその異体字として「胸」の「正」の上部に、「一」を書く漢字と、例へば「前」の漢字の第一・二画を書く漢字の二種類を収録してゐる。[6]「胸」は胸中、胸裡の意である。「蟠」は龍や蛇などがとぐろを巻いて伏してゐる、わだかまることから、積る、集る、満ち渡るといふ意味を派生する。ここでは、その胸中には数多くの医学書が集り積って所蔵されてゐるかのやうで、いはゆる生き字引のごときであると言はうとしてゐる。なほ、この発想なら胸より脳の方が適してゐるやうであるが、古い成語には胸を使ふことが多い。例へば、「胸中、自ら数万の甲兵有り」（大いなる知略）、「胸中、墨無し」（詩文の才能）、「胸中、成竹有り」（備はった計画）などが知られてゐる。これは「胸臆・胸奥」といふ語があるように、「昔の人は考えが胸から出るとした」[7]からだと思はれる。

○地下僊―地下はあの世、冥土、僊は仙人、やまびとのことであるが、このままでは意味が取りにくい。死にかかってゐる病人を生き返らすことができるのは、死後の世界の仙人たる資格、能力を持ってゐると、その力量を讃へてゐるのであらう。

○典薬頭―宮内省に属する官司で、宮中の医療、薬園、官人の医療、医師の養成などを取扱ふ典薬寮の長官。

○後昆―昆はあと、世継のことで、後昆は子孫、後裔、末裔の意である。

○歳舎―歳星が舎（やど）（宿）ることで、歳次と同じである。歳星（木星）は十二年で天を一周し、その一年に一次を行く。「歳次辛亥」（萬葉集二二八）は「歳、辛亥に次（やど）る」と訓む。一般にいふ干支のことである。

○前南禅昕叔老衲顕晫―「前南禅」（前任南禅、準南禅、不住）とは「補任されるが、入院（入寺のこと）の式を行わない他山の僧」のことで、「紫衣を身にまとい名誉となる」[8]ものである。これは「南禅寺の歴代にはならないが南禅寺の前住位」[9]といふ称号である。昕叔顕晫（天正八年〈一五八〇〉―万治元年〈一六五八〉）は相国寺の子院、慈照院の住職から同寺鹿苑院に遷り、第四十六代の僧録司に任ぜられた。僧録とは臨済宗の寺院を取締り、僧の人事を司どる役職である（ただし、鹿苑僧録はこの代で廃絶し、以後、南禅寺金地院に移された）。その後、相国寺第九十四世の住持を務めてゐる。詩偈で「前南禅」といふ肩書で表したのは、寛永十七年（一六四〇）に不住の「前任南禅」の資格を得たことによる。この僧位は他山の住持よりも高い位で、南禅寺の「準世代」とも称せられ、最高位の深紫衣を着用することが許された。南禅寺は「天下五山の上」に位置する寺格があったのである。顕晫が明暦二年（一六五六）に揮毫した書の落款は「禅」の漢字の偏と旁の間に「南」の漢字を配して「南禅」を意味する印と、昕叔の印の二つを押してゐる。「老衲」の衲は僧侶の自称で、老僧を謙遜して言ったのである。[10]

四、和気基成像

〈本文〉（一部）

忍我三折　具仙五通

〈訓読〉

我を忍び三折　仙を具へ五通

〈現代語訳〉

自分自身、耐へ忍んで地道な修行を積んで良医になり、仙人になる術を有して、五つの超人的で不思議な能力を得た。

〈語釈〉

○三折―三度（何度も）、肘を折るほど経験を積んで、良医となること。この肘は自分、また他人の肘の両説がある。地道な修行を積むことをいふ。

○五通―「五通」は五神通ともいひ、『広説佛教語大辞典』によれば、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通（如意通）をいふ。「特別な修行者のもちうる五種の超自然的な能力のこと、五つの超人的な力」の意である。五通仙はこの五神通を得た仙人のことをいふが、ここは前句と対句表現を成し、「忍我」と「具仙」、「三折」と「五通」がそれぞれ対応してゐる。「仙」は仙術、仙人になる術であり、それを整へ具へて「五通」を得たことを言はうとしてゐる。苦労して地道な修行を重ねて、すぐれた医師となり、超自然的な能力を持って、五神通を体得したのである。ここにも道教的な考へが見られる。基成は時成の長男で、典薬頭、侍医、内匠頭として父の医道を継いだ。仁治四年（一二四三）に六十五歳で没し、正四位上に叙せられた。なほ、基成の代はその後、六代で絶えてゐる。[11]

〈注〉

（1）『思文閣古書資料目録』一二八、平成四年一月。和気長成像は和気親成像、和気氏口宣案とともに杉立義一（桂仙堂文庫）蔵。筆者はこの写真版を思文閣出版古書部より戴いた。

（2）『落款の疑問100』一二二―一二五頁、『墨』編集部編、芸術新聞社、同二十六年。

（3）同二十七年一月二十九日付、筆者宛の書簡。

（4）ちなみに、前述の和気長成像は左向きで、賛は右へ、一方、和気親成像（「五清」の署名があるが、不詳）は右向きで賛は左へ書かれ、また、両者とも衣冠姿で描かれてゐる。長成は時成の甥、親成は時成の子で、ほぼ同時代の医家であった。二像とも「和気氏某家系に伝来した」ものとされる（「和気（半井）氏の肖像」（杉立義一『北陸医史』十五ノ一、平成六年）。このことから二像は「和気氏二幅対」と言へよう。同じころに和気医家の二幅と三幅が揃ってゐたことに深い意義があると思はれる。

（5）「和気氏系図」（『群書類従』五、系譜部四、巻六十三、三一四頁）に次のやうに記す。「…始めて武家の医に准じ、法師躰と為る、法名宗鑑」。山崎佐『江戸期前　日本医事法制の研究』四四二―四五二頁、中外医学社、昭和二十八年。新村拓『日本医療社会史の研究』九〇―九四頁、法政大学出版局、同六十年。

（6）上田萬年・栄田猛猪ほか編著『新大字典』一九〇八頁、講談社、平成五年。『新撰漢字総覧』本文編、四〇五―四〇六頁・索引編、四一七頁（プロジェクト代表者田村毅・片山英男、漢字監修山口明穂。オン・デマンド版）小学館、同十三年。京都大学附属図書館蔵。

（7）尾崎雄二郎ほか編『角川大字源』一四五一頁、角川書店、同四年。

（8）櫻井景雄『南禅寺史』下五九五―五九九頁、法蔵館、昭和五十二年。

（9）玉村竹二『臨済宗史』三九七頁、春秋社、平成三年。

（10）相国寺に関する経歴は次の書による。小畠文鼎撰『萬年山聯芳録』巻三、子院世譜二、六―一一頁、相国寺刊、昭和七年、美濃判、謄写刷、京都大学文学部図書館蔵。後に活字化されて『相国寺史料別巻』一二八頁、思文閣出版、平成九年。

（11）（5）の系図、三一二頁、近藤敏喬『宮廷公家系図集覧』（和気　宇佐使　医家）東京堂出版、同六年。

Formation and Annotation of the Triad of The Wake Clan in the Collection of Jingoji Temple

—A Revised and Enlarged Edition < Part 2 >—

Isao WAKAI

Contents

1. The meaning of this paper and a triad
2. Wake-no-Kiyomaro's portrait
3. Wake Tokisige's portrait
4. Wake Motoshige's portrait

Keywords: the triad of the Wake Clan (和気氏) in the collection of Jingoji Temple (神護寺), how to write of a triad, Wake-no-Kiyomaro (和気清麻呂), Wake Tokishige (和気時成), Wake Motoshige (和気基成)